

優秀賞

手紙で伝え合おう

山形県 酒田市直西荒瀬小学校五年 今井 娃娃

何で私が。友達が出来ないかもしれない。つらい。いやだ。悲しい。マイナスの言葉しか頭にくかんでこない。友達からもらったプレゼントの色が真っ暗になって見えた。転校したくないという気持ちのまま、車に乗った。父の仕事の関係で転校することになった。

友達に忘れられるのではないか。そんな暗い気持ちの私を元気づけてくれたのが親友からとどいた一通の手紙だった。親友は私より先に他の小学校へ転校した。手紙の中にはたくさんのお手紙が書かれていた。

「心の中のためにためておかず、相談してね。はなれていても応えんしているよ」

おさえていたなみだがいっぱいあふれ出てきた。なみだ一つ一つに意味があった。ありがとう。会いたい。もどりたい。私をささえてくれている。がんばろう。

だろう。手紙を読んだ後は心のトゲがとれて温かくなったような気がした。新しい学校でも前向きな気持ちでがんばれる、そう思った。親友の手紙の言葉にはげまされ、新たなスタートを切る事ができた。

新しいかんきょうでは、祖父母が毎日

「おかえり。」

と言ってむかえてくれる。暑い日は冷たいお茶を用意して待っていてくれる。祖父母が畑に行っていない時は、広告のうらにマジックで、

「暑い中、がんばってきたね」

と、祖母からのメモが置いてある。ちょっとした短いメモだが、毎回ちがう文が書いてあり、私の一つの楽しみになっている。

「おじいちゃん、ただいま。」

今日はよんでも返事がない。部屋にかけこんで行くと、具合が悪そうな祖父のすがたが見えた。祖母

はうわの空で、私が声をかけてもうなずくだけだった。二人ともまるで嵐にふかれておれそうないだのようだった。

私は祖父母の笑顔で毎日元気に学校へ通っている。今度は私がささえる番だ。親友が私にしてくれたように私も入院中の祖父に手紙を書いた。

「一日でも早く元気になってね、おじいちゃんの写真が私の力になってるよ」

手紙を見た祖父は目じりにしわをよせ、本当にうれしそうに顔をしていた。

「心からありがどうの気持ちでいっぱいだよ。」と何度も私に向かって頭を下げていた。手紙には人の心を安らげるパワーがやどっていると感じた。

今の時代はメールですぐにつながることが出来る。とても便利だ。手紙は書くのに時間がかかるし、相手にとどくまで少し間があく。だが、時間がかかるぶんだけつながりが深くなるような気がする。文字には温かみがある。親友が書いてくれた手紙や祖母が書くメモのように。

「暑中見まい申し上げます。いつも一生けん命働きますがたがかっこいいです。おばあちゃんのおい、おじいちゃんの写真が大好き」

